『幻夢物語』内閣文庫本の底本に関する小論

金　有　珍

一、『幻夢物語』内閣文庫本

『幻夢物語』は御伽草子の稚児物語の一種であり、『実隆公記』文明十七年（一四八五）正月十七日の記事からそれ以前の成立と考えられる。物語の概略は以下のとおりである。京の大原で仏道修行をする幻夢は、受戒のために比叡山を訪れた日光山の稚児花松と連歌を交わし、恋慕の情を募らせる。花松の面影が忘れられない幻夢は、翌年、日光山にまで向かい再会を果たすが、実は花松は父親の敵討ちを果たして自分も討たれ死にし、再会したのはかの幽霊であった。幻夢は愛着恋慕の無常を悟り、そのまま高野山に行って隠遁する。花松の命日、高野山で偶然にも、花松に親を討たれ、また花松を討ったことをきっかけに出家をした若い僧と懺悔話をすることになる。二人は不思議な因縁に涙し、互いに仏道修行に励んで同じ日に往生を遂げる。

『幻夢物語』の先行研究としては、市古貞次氏、後藤丹治氏、古川清彦氏が物語全般について考察しており、徳田和夫氏、西沢正二氏、濱中修氏、青木裕子氏によって類話・引用関係や稚児の性質等が論じられている。また、伝本関係については、松本隆信氏、高橋秀城氏の論考が参照できる。[1]『幻夢物語』の伝本は三種類に分けられるが、第一類には日光輪王寺図書館本（写本）、続群書類従本があり、第二類には内閣文庫本（写本）、東京芸術大学大学美術館本（絵巻二巻、以下、芸大美術館本）、続史籍集覧本が属する。第三類には随心院本（写本、単簡）が伝わる。[2]次節で詳述するように、続史籍集覧本は寛文四年（一六六四）版本の写しであるが、内閣文庫本の表紙裏にも次のような文章がある。

ケンム物語寛文四年ノ板行世ニ流布ス
板本の跋ニ

于時寛文四甲辰歳正月吉日　松長伊右衛門開板
トアリ疑ラクハコノ本板本ヲ以テ写スカ可考

つまり、内閣文庫本が寛文四年の版本を写したものではないかと指摘しているが、寛文四年版本は現在、所在不明であり、事実の確認は容易ではない。内閣文庫本の底本については二つの見解があり、市古氏は右の表紙裏及び内閣文庫本が続史籍集覧本とほぼ同文であることをもって、内閣文庫本が版本の写しであろうかと推測している。しかしながら、『室町時代物語大成』四（以下、『大成』）所収『幻夢物語』冒頭の解説は、この文章を載せながらも版本としての可能性を否定、「本書の本文中には、所々に改行をした所がある。また、中程で「上終」と記して、改丁をしている。これは、本書のもとになった本は二巻の絵巻であって、改行の所は、そこに絵があったためと考える方がよいのではないか[3]」と絵巻としての可能性を示している。同じ第二類の芸大美術館本（絵巻二巻）の存在が想起されるが、実際に閲覧したところ、両本はほぼ同文であるにもかかわらず、絵の数や位置、詞書の段落がほとんど異なり、直接な影響関係は認められない[4]。以下、本稿では上記二つの説を参考にしながら、内閣文庫本の底本の形態について考察する。

二、内閣文庫本と続史籍集覧本との関係

続史籍集覧本は内閣文庫本と同じく、文明十八年の本奥書と「唐土の書は…」で始まる文章を奥書に有する。その最後には「于時寛文四甲辰正月吉日　松長伊右衛門開板」「幻夢物語一巻得百華菴所蔵本板本而謄写焉于時安永七年戊戌仲秋廿七日夜燈下識　南畝子」とあり[5]、寛文四年版本の存在および続史籍集覧本がその写しであることが知られる。第二類本は三本ともにほぼ同文であるが、内閣文庫本はその異同個所において続史籍集覧本とほぼ一致し、芸大美術館本と両本との間では少し距離があると考えられる。内閣文庫本と続史籍集覧本の異同個所を記すと次のようになる[6]。

【内閣文庫本の丁行…内閣文庫本―続史籍集覧】

・一丁表六行…おとろをる―おとろふる
・一丁裏三行…大原―大野
・二丁表六行…しられけり―しられたり
・二丁裏四行…三学をかけされ共―三学をうけされ共
・二丁裏八行…大地―大池
・二丁裏九行…雲雰―雲霧
・四丁表六行…まふて候―まうてゝ

・四丁表八行…ことに此神はしやかによらひ—ことにこのしかによらい
・五丁裏三行…ともから—ともかう
・五丁裏七行…かひだいゐん—かいたんゐん
・六丁裏八行…難及—およふへからす
・七丁裏四行…小松のはな—小春はな
・八丁裏一行…候へは—候間
・八丁裏七行…一度に—ことに
・八丁裏九行…坂本へ—さかもとに
・九丁表四行…縁—きえん
・十丁裏三行…日比—日こと
・十三丁表一行…あらし—風
・十四丁裏三行…すきゆく—すきゆく
・十五丁表一行…詠せし—なかめし
・十六丁表六行…申やう—いふやう
・十六丁裏六行…御ありき候はんには—御あるき候はんには
・十八丁表五行…とうにこそつきにけり—たうにこそつきにけれ
どうのうちに—たうのうちへ
・十八丁裏八行…いとゝうき人の事のみ—いとしうき人のことのみ
・二十三丁表四行…御目に掛候迄にこそ—御目にかゝり申までにて
・二十三丁裏四行…御意にまかせ申さん—御意にしたかひ申さん
・二十四丁表五行…うちにいりにけり—内へいりにけり
・二十四丁裏九行…物語なとするこゑ—物語なんとする声
・二十六丁裏三行…仰にしたかひ候はんとて—おほせにしたかひなんとて
・二十八丁裏三行…人のあやしみありて—人のあやしみありと
・三十一丁裏三行…出家仕給ひて—出家し給ひて
・三十三丁裏一行…御心さしあさからさりし故—御こころさしあさからさるゆへ
・三十三丁裏四行…くわひしの事も数奇の事にて—くはいしの事もすきのことにて
・三十五丁裏一行…三部経—三都教
・三十六丁裏七行…思ひ入たるけしきにて—思ひいれたるけしきにそ
・三十七丁表一行…後世をおそるゝけしきなり—こしやうををそるゝけしきなり
・三十七丁表八行…ちごのおもかけ今みる心ちして—ち

このおもかけ今しる心地して

・三十七丁裏四行…客僧は—若僧は

・三十八丁表三行…花松殿と申せし人—花松殿と申せし
ちこ

・三十九丁表一行…親の供養にもいとなみ—をやの供養
をもいとなみ

・三十九丁表六行…前宵は—こよひは

・三十九丁裏八行…いへは—いひけれは

・四十丁表二行…はやく〳〵—はや〳〵

・四十丁裏八行…過去遠々の生死のかうゐんをは—過去
遠くこの生死のこうゐんをは

・四十一丁裏九行…道心の祈申によつて—道心をいのり
申によつて

・四十四丁表四行…をろかにくらき人の—おろかにくう
きの人の

・四十四丁表六行…今此双紙の言葉—本此双紙の詞
いやしきといへとも—いやしゝとい
へとも

以上の個所を見ると異なる部分とはいえ、本文の内容に影響を及ぼすようなものはなく、同じ本文からの誤写や改変と認められるものがほとんどである。よって、寛文四年版本と内閣文庫本に直接的な関係があることは確かであろう。ちなみに、両本の異同個所を芸大美術館本と比較すると、明らかな誤謬を除いて、続史籍集覧本と芸大美術館本とでは一致する個所が多く、内閣文庫本の書写時に改変もしくは見誤りがあったと推測される。では、『大成』の指摘のように、もとになった本が絵巻である可能性はどうであろうか。前述した改行・改丁の個所が絵巻の特徴を表すものかについて考えてみたい。

三、内閣文庫本の形態上の特徴

内閣文庫本には九か所の改行・改丁があり、『大成』は「上終」の個所のみを改丁としているが、実際には、改行としている個所の中で二か所は改丁にあたる。内閣文庫本の改行・改丁の所を／で示し、前後の本文を引用してみると次のようである。[7]

①二丁表：改行（一文字空白）

人間の有様、眼前の境界（キヤウガイ）、時、人を待たぬ有様は、朝顔の日かげを待ち、夜の月の暁の雲にかくらふも、我が身の上に知られけり。／幻夢、いたづらに年月を送り、星霜をかさぬといへども、更に生死の根源を切るべき便りなし。

②四丁裏：改行（四～五文字空白）（図一）
（略）神殿動揺し、玉の簾さゝめき、宝殿の内より迦陵頻の御声にて、自性の心月を明らめんと思はゞ、根本中堂の薬師如来に祈り申すべし、と夢うつゝともなく御示現ありければ、／幻夢、悦びの思ひをなし、ひたすら根本中堂に参り、薬師の十二大願をあふぎ祈念怠る事なし。

③七丁表：改行（一～二文字空白）
さるほどに、やゝ久しくありけれども、雪も晴やらず降りければ、この稚児、同宿の法師に仰けるは、「東は志賀の浦、南はながら山なれや。／忠度の詠し跡を思ひ出、西は深山の峰おろし、落葉をさそふ神無月、しぐれの雲を吹きかへて、雪のふぶきの山ごえ、けふこそ思ひ知られ候へ。（略）」

④十二丁表：改丁（三行空白）（図二）
「さる事候。下野の日光山の戒者とて、是に御泊り候つるは、今朝、夜の中にいなかへ御下り候が、大原よりとて御尋ね候御方候はば、これをまいらせよ、とて文の候」とて出しければ、／幻夢、心も心ならず、夢うつゝともわきまへず、（略）」

⑤十七丁裏：改丁（七行空白）
「これより五町ばかり、峰に行きて堂の候。それにて今宵をば御明し候へ。あれにともし火の見え候所にて候。其外、本堂もかたく禁制にて候。あわれ、寺中の戒めだになく候はゞ、一夜の事は、貸し申したく候ものを。今は暇申す」とて、堂の方へぞ行にける。／幻夢、いよ〳〵心うくて、涙と共に知らぬ山路に分け入ける。

⑥二十六丁裏：改丁（「上終」の文字は二行分にわたる大文字）（図三）
幻夢申すやう、「ただ同じくは、小人あそばし候はゞ、これまでの旅の思ひ出に仕候べし」とかたく申しければ、「さらば仰せに従ひ候はん」とて、かくなむ、

夜あらしはあす見ぬ花の別れかな

とありければ、／上終／幻夢申すやう、「推参なる申すことにて候へども、御心安く存じてなり。御句は面白候へども、あまりに禁忌の句にて候へば、少、御直し候へかし」といひければ、（略）

⑦三十一丁表：改行（二文字空白）
「（略）この稚児と申すは、当国の住人たひこのさつたも

りの将監家明と申す人の子息なり。七歳の時、父家明、同国の住人小野の／太郎兵衛親忠と申す人とのりあひ咎めをして、あへなく討たれ候。」

⑧三十七丁裏：改行（一文字空白）

「あら南無阿弥陀仏、うき世のならひ定めなき事かな。こぞの今宵、親にてありし人を討たせて、当座に敵を取たりし稚児の面影、今見る心ちしていたわしくこそ覚ゆれ」とて、涙を流し、しばしが程、袖を絞りかねたる風情なり。／幻夢、これを聞き、不思議に思ひていふ様は、（略）

⑨四十二丁裏：改行（一～二文字空白）

かくの如く昔物語は、狂言綺語（キギョ）のたわむれと申しながら、定めなき世の有様を、嵐にもろき／花松殿になぞらへ、時を待たざるあだし身を、暁の鐘を聞く夢の源にたとへ、無明の雲を払ひ、真如の月に会はしめむ為の方便なり。

以上、九か所の改行・改丁を見てみると、②④⑥⑦⑨の五つは文章の途中で改行・改丁されており、③は文章としては終わっているが、稚児の花松の台詞の途中で改行している。さらに、⑥は上巻と下巻を分ける所にもかかわらず、文章が完了していない。実際、『大成』所収の御伽草子の絵巻には、このように文章の途中に絵が位置する例が少なくない。『大成』には四八〇の御伽草子の伝本が収録されているが、そのうち約一〇〇本が絵巻の翻刻であり、その三分の一程度に上記のような絵と詞書の配置が見られる。[8]

しかし、御伽草子の伝本には絵を含むものが多く、絵入り写本、古活字版、奈良絵本、絵入り版本でも文章の途中で挿絵が入る例が数多く存在する。特に奈良絵本と絵入り版本では、むしろ、大多数において文章の途中に挿絵が位置する。『大成』所収の奈良絵本は、約一〇〇本のうちに四分の三程度、絵入り版本は、八三本のうちに七〇本がこのような形で挿絵が配置されている。[9]

絵巻、奈良絵本、絵入り版本を比較する際、巻が変わる所にもかかわらず、文章が完了していない⑥は興味深い。このような例は『大成』所収の絵巻にはみられない。絵巻は、奈良絵本と絵入り版本とに比べれば一巻で終わるものが多いため、単純に比較するのは難しいが、奈良絵本と絵入り版本は内閣文庫本と同様、巻が変わるにも関わらず、文章が途切れたままである例がいくつか存在する。[10]それらの伝本を『大成』の通し番号、題名、該当個所を引用して記すことにする。

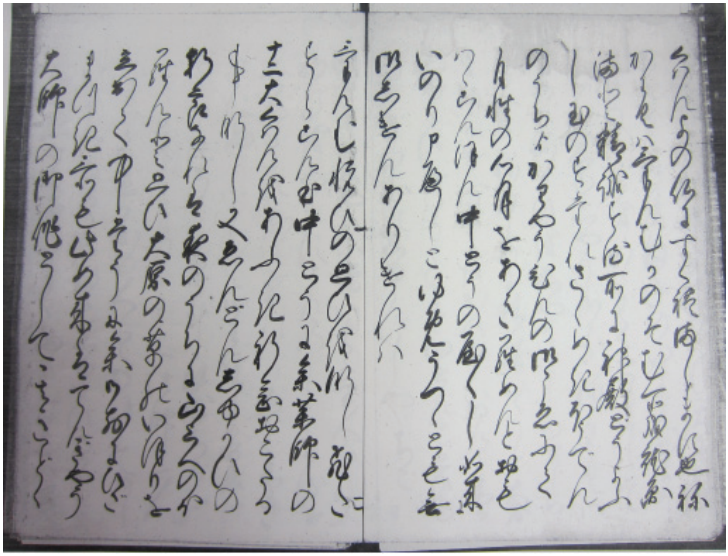
【奈良絵本】

①一八五『しぐれ』（中・下巻「申けれは／みかと」）
②三五七『文正草子』（上・下巻「見えさせたまへは／ひやうゑのすけ」）
③三六七『宝蔵比丘』（上・下巻「申せは／我こそ」）
④三八六『みしま』（上・下巻「申けれは／さて」）
⑤四四二『きぶね』（上・中巻「のたまへは／こんつ女は」、中・下巻「のたまへは／君の御いのちは」）

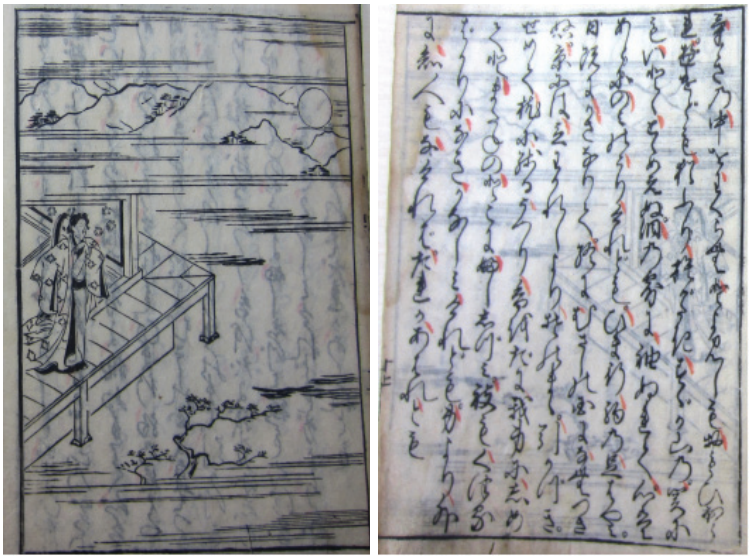
【絵入り版本】
①五一『魚太平記』（上・中巻「実説また安定（さたか）ならさる処に／三月十三日の夜半に」）
②一一一『貴船の本地』（上・中巻「申給へは／中将」）
③一三四『恋塚物語』（上・下巻「のぼりしが／かほどに」）
④二一一『諸虫太平記』（上・下巻「某（それかし）が穴の巣に定（さだめ）、敵（てき）／大手、二之丸に、懸寄（かけよせ）ば」）
⑤二六九『中将姫本地』（上・下巻「姫君の仰けるは／なんぢ」）
⑥二八四『鶴の草子』（上・中巻「のぞき給へば／きたのかた」）
⑦三二一『花世の姫』（中・下巻「ありけれとも／よみかき給ふことにも」）
⑧三四七『富士の人穴草子』（上・下巻「あさゆふ／下人などにも」）
⑨三六五『判官みやこはなし』（全五巻、四・五巻「こすはあらじとて／さま〳〵、くわこん申候」）
⑩三九七『物くさ太郎』（上・下巻「しら／じと思ひて」）

『大成』所収の作品のうち奈良絵本は五つの伝本から、絵入り版本は十の伝本から、文章の途中で巻が変わる例が見られる。むろん、御伽草子には『大成』所収の伝本よりもはるかに多い伝本が存在するが、これらが一つの傾向を示しているといえるであろう。

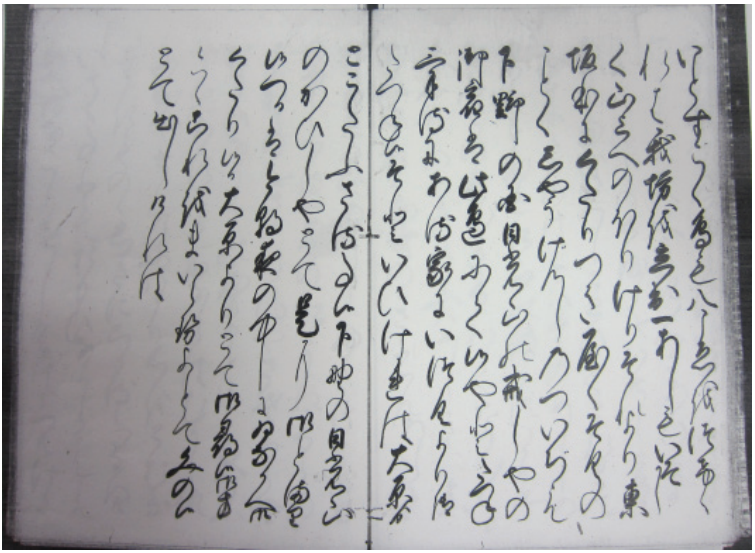
もう一つ注意したいのは、挿絵の位置を表した方法が改行と改丁で一定せず、その空白も均一ではないことである。これに比べて『大成』で絵巻や奈良絵本の絵抜き写本としている他の伝本は、挿絵があった場所の表示が一定していることが分かる。該当する伝本は七つであるが、本文の間に「第一」、「絵」、「此所絵有」等の文字を入れて表示しているものに、九『秋夜長物語』、一二九『源氏供養草子』、一三一『還城樂物語』、四七九『頼朝の最期』があり、七四『大江山酒典童子』は一行の空白を、二二三『硯破』は半葉の空白を入れ、四四六『琴腹』は改行を行っている。[11] 表示の仕方は伝本



【図一】内閣文庫本、四丁裏・五丁表

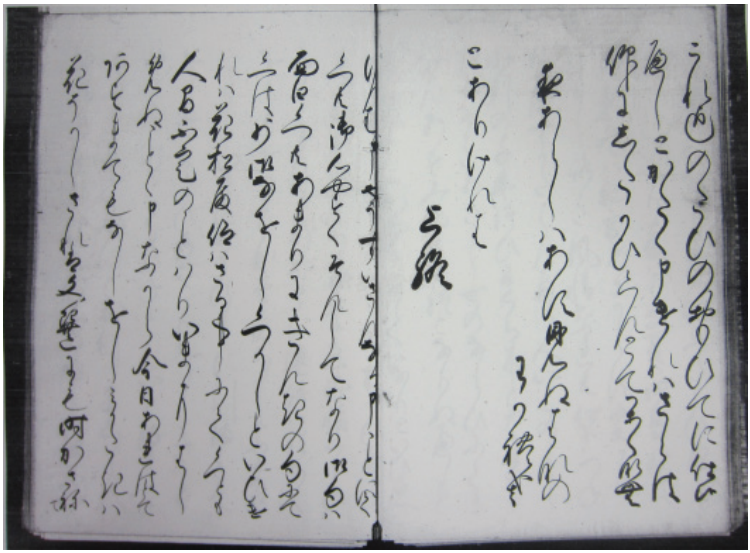


【図四】『花の縁物語』上巻十七丁表・裏



【図二】同右、十一丁裏・十二丁表

【図五】同右、上巻三丁裏・四丁表



【図三】同右、二十六丁裏・二十七丁表

【図六】同右、上巻十三丁表・下巻一丁表

によって異なるが、本の内部では一定しているのである。

奈良絵本は流し書きをするなど、絵の前の本文に余白を持つ例が多く、絵入り版本でも数文字、数行の空白を持つ例が少なくない。ただし、稚児物語には奈良絵本の伝本はあまりなく、『幻夢物語』も奈良絵本の存在は記録等に見られない。これと比べて版本の場合は、斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録』（井上書房、一九六二年～一九六四年）所収の目録と索引によると、二『増補書籍目録』（寛文十年）、三『増補書籍目録』（寛文十一年、二の追補）、六『古今書籍題林』（延宝三年）、七『改正公益書籍目録』（貞享二年、六の増補修印）、九『新版増補書籍目録』（元禄十二年）、一〇『新増書籍目録』（延宝三年）、一二『書籍目録大全』（天和元年）、一六『増益書籍目録大全』（元禄九年刊、宝永六年増修）、一八『同』（正徳五年修）の九つの目録から『幻夢物語』（二冊）の名前が確認される（一〇以下は『けんむ物語』）。

たとえば、三一八『花の縁物語』（寛文六年版本）[12]のような伝本を挿絵抜きで書写すれば、『幻夢物語』内閣文庫本と類似する形になるのではないだろうか。図四の個所は本文の最後に数文字の空白があり、続いて挿絵が位置するが、挿絵抜きに書写すれば、図一のようになるであろう。図五は本文に数行の空白があって挿絵が続くが、図二と対応する。図六は上巻の終わりと下巻の始めで、上巻は文章のあと挿絵で終わっているが、それを抜きに続けて書写すれば、図三のような形になる。これらの傍証をふまえて考察すると、改行や改丁を理由に内閣文庫本の底本を絵巻と断定するのは難しいと考えられる。

四、おわりに

以上、本稿では、『幻夢物語』内閣文庫本の底本の形態について二つの説をもって考察した。まず、内閣文庫本は、寛文四年版本を謄写した続史籍集覧本と酷似する本文を持つことから、寛文四年版本かそれと同文的な本文を持つ本からの写しであると考えられる。また、絵巻の写しからの特徴と推定された改行や改丁も、御伽草子の奈良絵本や絵入り版本にも類似する挿絵の配置が見られることから、絵巻の写しであることに起因する特徴と特定できるものはないと考えられる。さらに、改行や改丁の形が一定せず、そのような形が版本にはよく見られることも注意すべき点であろう。以上のことを合わせて推測すれば、内閣文庫本の底本は絵入り版本であり、それが寛文四年版本か、それと同様な本文を持つ版本であったと推定されるのである。

注

1　市古貞次「中世小説解題（三）」（『書誌学』十三・五、一九三九年十一月）、後藤丹治「第一編第五章　児物語の研究」（『中世国文学研究』、磯部甲陽堂、一九四三年）、古川清彦「日光山の僧坊文学―幻夢物語と弁草紙―」（『国語と国文学』二十九・八、一九五二年八月）、徳田和夫「室町後期の説話と、お伽草子」（『御伽草子研究』、三弥井書店、一九八八年）［初出］「室町後期の説話とお伽草子―『雲玉和歌抄』を繙いて―」（『国語国文学論集』一六、一九八七年三月）、西沢正二「『幻夢物語』と『三国伝記』との関係」（『国文学　解釈と教材の研究』十五・十六、一九七〇年十二月）、濱中修「『幻夢物語』攷―神聖なる童子―」（『室町物語攷』、新興社、一九九六）［初出］「幻夢物語考」（『中央大学国文』三十七、一九九四年三月）、青木裕子「法楽夢幻―『幻夢物語』をめぐって」（徳田和夫編『お伽草子百花繚乱』、笠間書院、二〇〇八年）、松本隆信「室町時代の稚児物語の諸本」（小松茂美編『芦引絵』、続日本絵巻大成二十・月報十六、中央公論社、一九八三年）、高橋秀城「随心院蔵『源夢物語』翻刻」（藤巻和宏編『随心院聖教と寺院ネットワーク』第二集、随心院聖教調査研究会、二〇〇五年）。

2　『幻夢物語』の伝本分類は、古川氏が第一類と第二類に整理したものが広く使われてきた。随心院本は一九九五年に新たに紹介された本であり、第三類に分類した先行研究はない。本稿では、高橋氏の前掲論文（「随心院本と第一類本・第二類本を比較してみると、ある箇所では第一類本に近く、ある箇所では第二類本に近いというように、細かな点で多くの相違点がある。」）に基づいて第三類に分類した。

3　横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』四（角川書店、一九七六年）。本書の『幻夢物語』は内閣文庫本の翻刻である。

4　芸大美術館本の絵巻二巻は、上巻に七図、下巻に六図の絵を有し、内閣文庫本の改行・改丁の数（九か所）とは異なる。絵の位置も内閣文庫本とは⑤のみが一致し、詞書はすべてまとまった文章で完結している（内閣文庫本の改行・改丁については第三節に詳述）。閲覧において、同美術館助教の芹生春菜氏のお世話になった。深く感謝申し上げたい。

5　内閣文庫本の奥書には最後に「寛文八歳申五月三日　書之」とある。内閣文庫本は国文学研究資料館のマイクロフィルムを用いた。後半の図版も同様である。

6　本文の引用は内閣文庫本、近藤瓶城編『続史籍集覧』児物語部類（近藤活版所、一八九四年）による。漢字と平仮名の違い及び助詞、単語、句の脱落、単語の間の「の」、動詞の間の「て」（たとえば「すきくたりけるー過て下ける」）は省略した。ちなみに、『大成』の誤謬であると考えられるものに以下の五つがある。一丁表二行「現光十善」（『大成』「珎」）六丁裏六行「みたれたるにかみ」（『大成』「御」）、二十二丁表九行「なみたのとかく春のならひか」（『大成』「ゝ」）、三十丁表五行「ちりわかれける」（『大成』「たる」）、三十一丁表三行「親忠と申人とのりあひ」（『大成』ナシ）。

7　内閣文庫本の本文に句読点、濁点を振り、漢字を当てるなど、適宜表記を改めた。

8 絵巻のうち、文章と絵が入り込む形で区別をつけることが困難なもの、絵と詞書が上下に位置するものは排除した。また、現在の形が絵巻でも改装前は冊子等の場合は排除、現在の形が絵巻でなくても、改装前は絵巻であった場合、書写したもとの本が絵巻であったと判断されている場合は絵巻に含めて計算した。また、二巻のうち一巻がかけているなど、残欠のため外したものがある。残欠の本でも内閣文庫本と同じ例が見られる本は含めた。

9 奈良絵本も絵巻と同じ方法で数えた。絵入り版本は全部で八五本であるが、うち二本は絵と文章が上下に位置するため除いた。

10 一例ではあるが、写本（挿絵なし）でもこのような例がある。一六二『小枝の笛物語』（上・下巻「悪趣にはおとさしと／ちかひあれは」）。

11 七四『大江山酒典童子』（麻生太賀吉蔵）、一二九『源氏供養草子』（赤木文庫蔵）、については、影印等の確認はできなかったが、『大成』の冒頭の解説から絵があった場所の表示が一定していることが分かる。以下その解説である。七四「本書はもと絵巻で行われたものを、絵を省いて詞書だけを写したものらしい。文段の切れ目に約一行の余白をおいた所が多い。又、各巻の本文の末にも画図があったらしい。そこで全巻の画図を数えると五十四図による。」、一二九「本書は絵巻から転写した本である。画図のあった個所には「絵」と記してある。」。

12 『花の縁物語』（内閣文庫蔵）には六図の挿絵があり、挿絵の前に数行空白がある個所が四か所、数文字の空白になっている部分が一か所あり、残りの一か所は奈良絵本のような流し書きになっている。『大成』の翻刻によると、四番目の挿絵で上巻が終わり、文章の途中で上下巻が変わる例にあたるが、原本は三番目の挿絵で上下巻が変わり、その段落はまとまった文章で終わっている。